

文化・芸術

「婦人像」

1937年、油彩・カンバス
45・8センチ×38・0センチ

長谷川利行（1891～1940年）

荒々しくうねり、不規則に重なり合う線と線。キャンバスに下地を塗らず、思いのまま自由奔放に線を走らせる描き方は、「利行（リコウ）」と呼ばれて親しまれる、長谷川利行独特の方法です。

利行は昭和の初め、関東大震災から復興する東京の街と人々の姿を情熱的な筆致で鮮やかに描き出した画家です。住む家や家族を持たず、放浪生活を送りながら作画活動を行い、49歳の時に行き倒れ同然で亡くなるという破天荒な人生を送りました。

本作は、東京・新宿の天城画廊に宿や酒代、画材を提供され、充実した画業を展開した1937年に制作された作品です。利行は街で偶然出会った人々をまるで写真を撮るかのように速写しましたが、本作のモデルはその服装から、カフェで働く女性でしょうか。利行らしい、画面を素早く駆け抜けるような直感的な筆致により、女性の美しさや品格、生命の輝きまでもが生き生きと描き留められています。

（佐藤）

《名画の扉》

大川美術館コレクション展
「特集展示：戦後80年松本竣介と
同時代の画家たち」から

